普通高等教育“十五”国家级规划教材

21世纪外国文学系列教材

日本现代文学选读(下卷)

(增补版)

于荣胜　编著

北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

日本现代文学选读

（下卷）

（增补版）

于荣胜　编著

北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

日本现代文学选读.下卷.增补版/ 于荣胜编著. —北京：北京大学出版社，2006.5

（21 世纪外国文学系列教材）

ISBN 7-301-10842-7

Ⅰ. 日… Ⅱ. 于… Ⅲ. ①日语-阅读教学-高等学校-教材 ②短篇小说-作品集-日本-现代 Ⅳ. ①H369.4 ②I

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2006)第 070286 号

书　　名：日本现代文学选读·下卷（增补版）

著作责任者：于荣胜　编著

责 任 编 辑：许耀明

标 准 书 号：ISBN 7-301-10842-7/I·0815

出 版 发 行：北京大学出版社

地　　址：北京市海淀区成府路 205 号　100871

网　　址：http://www.pup.cn

电　　话：邮购部 62752015　发行部 62750672　编辑部 62765014
出版部 62754962

电 子 邮 箱：zpup@pup.pku.edu.cn

印　刷　者：北京汇林印务有限公司

经　销　者：新华书店

650 毫米×980 毫米　16 开本　26.75 印张　450 千字

2006 年 5 月第 1 版　2006 年 5 月第 1 次印刷

定　　价：39.00 元

未经许可，不得以任何方式复制或抄袭本书之部分或全部内容。

版权所有，翻版必究　　**举报电话：** 010-62752024

电子邮箱： fd@pup.pku.edu.cn

目　录

一、小说正文 1

白い人 ..... 遠藤周作／1

楢山節考 ..... 深沢七郎／79

人間の羊 ..... 大江健三郎／141

時　間 ..... 黒井千次／171

草　木 ..... 中上健次／244

楽　土 ..... 中上健次／263

バス停 ..... 丸山健二／284

蛍 ..... 村上春樹／307

暑い道 ..... 宮本輝／344

キッチン ..... 吉本バナナ／369

二、日本现代文学史年表（小说） 414

三、主要参考书目 423

一、小说正文

白い人

遠藤周作

I

一九四二年、一月二十八日、この記録をしたためておく。聯合軍[1]はすでにヴァランス[2]に迫っているから、早くて明日か明後日にはリヨン市[3]に到着するだろう。敗北がもう決定的であることは、ナチ自身が一番よく知っている。

今も、このペンをはしらせている私の部屋の窓硝子が烈しく震えている。抗戦の砲声のためではない。ナチがみずから爆破したローヌ[4]河橋梁の炸裂音である。けれども橋梁を崩し、ヴィエンヌからリヨンに至るK2道路を寸断したところで津浪のような聯合軍は防ぎとめられる筈はない。巴里のフォン・シュテット[5]将軍はリヨン死守を厳命したというが、死守はおろか作戦的に後退すらうまくいくかわかったものではない。

どの顔も兇暴にゆがめられている。聯合軍にたいするナチの憎しみは昨日から、リヨン市民に注がれている。死に追いつめられた鼠が猫にではなく自分の一族に飛びかかるように、今日、フランツ、ハンツ、ペーター、[6]といったナチの兵士たちはリヨン市民たちをくるしめる、それだけの為に街になだれ込

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

んでいる。レピュブリック街[7]で、エミール・ゾラ街[8]で、彼等は娘たちを凌辱し、民家や商店をあらしたりしている。ナチの誇った軍紀など糞くらえ[9]だ。

私は彼等の血ばしった眼や憤怒にゆかんだ頬を想像するだけで、うすい嗤いが唇にうかぶのを禁じることができない。文化とか基督教とか、ヒューマニズムなどはなんの役にもたたない今日なのだ。ナチに限ったことではあるまい。聯合軍であろうが、文明人であろうが、黄色人であろうが、人間はみな、そうなのだ。今日、虐殺される者は明日は虐殺者、拷問者に変る。明日とはリヨン市民が牙をならして、逃げ遅れたドイツ人、彼等を裏切った協力者にとびかかる日だ。マルキ・ド・サド[10]はうまいことを云っている。

……かくて人間の血は赤くそまり
　　その目は拷問の快楽に赫き……

私のつむった眼の奥で、あの老犬を組みしいた女中イボンヌ[11]の弾力ある腿の白さがハッキリとうかぶ。私はそれを人間が、他者にたいする真実の姿勢だと思う。

イボンヌの白い腿……クロワ・ルッス[12]の家の窓から、グリーシヌ[13]の花の散る道に偶然みつけたあの小事件は私の少年時代にほとんど決定的な痕をのこした。けれども、他の少年たちならなんでもなく見過してしまったこの出来ごとが、なぜ、私にだけ焼きつくような極印をあたえたのだろう。今日、仏蘭西人でありながら、ナチの秘密警察の片割れ[14]となり、同胞を責め苛む路を私に選ばせたものを説明するために、幼年時代の記憶まで遡らねばなるまい。

私の父は仏蘭西人だったが、リール[15]の工業技術学校にいる時、独逸人の母と婚約した。結婚後、彼等はリヨンに住み、私はみにくい子だった。のみならず生まれつき斜視だった。後

年父を思いだすたびに、私はあの十八世紀の卑俗な放蕩児（リベルタン）の肖像画を想起してしまう。リヨンのオペラ座の横で、老婆たちがみだらな雑誌と一緒に売っている、拙い猥画の主人公たちの顔だ。実際、彼は、肉づきのよい、背のひくい、こぶとりの男だった。白いブヨブヨした肉体と、女のように小さな手をもち、涙腺が発達しているのか眼だけは、いつも、泪でぬれていた。後年、自動車事故で死ぬまで、病気らしい病気も、死の恐怖もしらなかった。

私は父のゴムマリのような肉体に指をあてたことがある。指跡は、いつまでも彼の白い皮膚の上にのこっていた。母がきびしい清教徒になったのも、考えると父の放蕩にたいする嫌悪からだったのかもしれぬ。自分の快楽しか顧みぬこの男は、やせこけた斜視の息子に愛情を持っていなかった。私が決して忘れることのできない仕うちがある。ある日、彼は指を私の眼の前に動かしながら云った。

「右をみろと云うのに、右だよ」それから彼はワザと大きな溜息をした。「一生、娘たちにもてないよ。お前は」

自分の顔だちのみにくさをハッキリ思いしらされたのは、この時からだった。私はそれを残酷に宣言した父を憎んだ。鏡をみることもくるしく、路で少女たちにすれ違う時やあたらしい女中に初めて引き合わされる時、辛かった。

私は父がどれほど母を愛していたかも知らない。彼は仕事のためと云って、一ヵ月の半分は留守にしていた。あれは確か、私が十一歳の時である。母はその日、家にいなかった。その日父は工場から突然、ひとりの若い栗色の髪の女を連れてかえってきた。ながいこと、二人は一室にとじこもったまま出てこなかった。女はかえりがけに玄関で私の頭をなぜ、「可愛い子ね」と云った。そのとき私はこの女を憎んだ。手さげの中から一袋

のボンボンをくれた。

女のこともボンボンのことも母には告げはしなかった。もちろん父へ味方したわけでもない。母に同情したでもない。私はただこの秘密を、秘密としてかくしておくことになぜか悦びを感じたのである。よる、寝床のなかで、そのボンボンを、音のせぬように口に入れながら、私はこの秘密の甘みをゆっくりと味わった。けれども誤解しないでほしい。今日の私の無神論は父の教育のためではない。清教徒である母への反抗からはじまったと云ったほうが正しいのだ。

一九三〇年代のリヨンにおけるプロテスタント[16]の家庭を今日、想像することはむつかしい。父にたいする反動から当然母は私に、きびしい禁欲主義を押しつけた。十歳をすぎてから従姉妹（いとこ）とさえも二人きりでいることを許さなかった。彼女はなによりも、私を罪に誘うものとして肉欲の目覚めを警戒したのである。夜、床につく時も下半身から眼をそらして寝衣に着かえさせられた。両手を毛布の下に入れることは絶対に禁じられた。母は、既に欲望の血が騒ぎはじめた私の肉体から、その炎をかきたてる一切のものを追い払おうと懸命だった。

おろかな母、と私は後年屡々思った。そのように気を配らなくても、私は娘に嘲けられる自分の顔だちを知っていた。彼女はふみくだかれた[17]灰から一層、火の燃えあがるという古い諺（ことわざ）を忘れていたのだ。とにかく、私はサン・チレーネ街[18]のプロテスタントの小学校で牧師がわれわれに与えた書物以外は絶対によまされもせず、普通その頃の年齢の子供の愛読する「灰かつぎ（サンドリアン）」[19]や「アラビアンナイト」[20]すらも、私の官能を刺激させ目覚ませると思ったのであろう、彼女は私がそれらの本を友人から借りることさえゆるさなかったのである。

一九三〇年頃のリヨンはまだ十八世紀時代のリヨンと殆ど

変っていない。ふるい湿気のこもった、何十年の人間たちの臭気の滲んだクロワ・ルッスの館で、私はなにもせずに独りで、ジッと生きていた。他の子供たちのように女の子とママごとをしたり、輪投げをすることさえ私にはできなかった。しかし、悪魔の最大の詭計はその姿を見せないことである。彼はすべての罪から隔てられた筈の私にある日、突然悪の快感を教えてくれた……

家の近所に飼主のない老犬がいた。むかし飼主は靴屋の老人だったのだが、それが肺病で死んでからも、犬はもとの家を離れず、毎日、あたりをうろつきまわっていた。私は登校や帰校のたびごとに、彼に出会うのを非常に懼(おそ)れた。皮膚病のためか毛の抜けた赤い生身がむき出ていたし、のみならず、その犬は死んだその旧主人と同じように、たえず、しわぶきながら[21]歩いているのである。そばに近寄れば、皮膚病菌でなくても、結核菌をうつされるような不安が私をいたくくるしめていた。

あれは春も終わりの日である。私は十二歳だった。その日、私は病気で学校を休んでいた。母は私を二階のベットにねせたまま、下の客間で、たまたま尋ねて来た牧師と話をしていた。しずかだった。

ベットから退屈のままに外を眺めていた。ベットは窓ぎわにあってすこし端によれば、家の前の路がみわたせたのである。

まひるのこととて路にはだれもいない。向い側の家の高い壁からもれ咲いているグリーシヌの紫色の花が風に吹かれて散りこぼれている。

が、私はふしぎな光景をみた。家の女中のイボンヌがジッと路の隅にしゃがんで、なにかを手招いている。時時彼女は片手から一片の肉をだして、それをふってみせる。私は訝(いぶか)しく思った。

病犬は咳きこみながら、イボンヌの方にヨロヨロ近づいていく。彼は、しゃがみこんだ彼女の両脚の間に首をたれて、哀願するような姿勢をとった。

と、イボンヌは肉片のかわりに一本の紐を手にした。片膝でもがく犬の首をおさえつけたまま彼女は老犬の口を一瞬にして縛った。私は窓に上半身を靠れさせたままふるえていた。イボンヌは肉片を、もう開くことの出来ぬ犬の口先に、なぶるように持っていく。犬は両足を痙攣（けいれん）させながら、あとずさりしようとする。イボンヌは右手をあげて、烈しく犬を撲（う）ちはじめた。その首が彼女の白い太い腿で押さえつけられているため、犬はただ脚だけをむなしく掻きながら苦しまねばならぬ。やがてイボンヌは片膝をあげ、犬の口を縛った紐をとくと、何くわぬ顔をして、私の家の玄関に歩いていった。

今日でも私は何故、あの女中があのようなことを演じてみせたのかわからない。恐らく彼女は、私の家から肉片をぬすんだこの老犬に復讐したのであろう。しかしその行為は、窓からそれを覗いていた十二歳の少年の生涯に決定的な痕跡を残した。私はふるえながら、一切をみていた。しかし、それは恐怖のためではない。可哀想な母が息子に強いた純潔主義（ピュリタニズム）の厚い城壁が、その日、音をたてて崩れたのである。私がその時味わったのは、情欲の悦びである。あの肺病やみの老犬の首を押えつけたイボンヌのむっちりした膝がしらは私の眼に焼けつくように白く、あまりに白くのこった。私の肉欲の目覚めは虐待の快楽を伴って、開花したのである。

自分のほの暗い秘密を人にかたる程、私は莫迦でもなくもう無邪気でもなかった。父も母も学校の牧師も、依然として、この私を悪の悦びを味わわぬ一人の少年と思い込んでいたろうが。

聖書でも私は自分に与えられた影像(イマージュ)にしたがって敬虔(けいけん)に祈るふりをしていた。だが、サン・チレーネのあのカルビン小学校の聖堂で私が仰ぎみたのは決して神ではない。壁にかけられた地獄の想像画、そこでは死んだ罪人は裸のまま、黒い悪魔に、責めさいなまれていた。彼等は鞭うたれ、あるいは手脚をもぎとられていた。かつて私に一種の恐怖をあたえたものは、今日、あやしい快感を疼(うず)かせる。私は鞭うつ悪魔の見ひらいた眼のなかに、あの日、はじめて味わった叫びたいようなよろこびをよみとった。

なぜ、そのような感覚が、他の子供には目覚めず、自分だけにひらかれたのか今でも私はふしぎに思っている。フロイド流にいえば[22]、こうしたサディスム[23]は子供の母にたいするコンプレックス[24]によると云う。もし、その理論通りならば、私は自分をきびしく教育した母を心ひそかに憎んでいたのではあるまいか。子供としての悦びや自由を禁じ、あのクロワ・ルッスの一室に幼年期を送らそうとした母の中に女性のすべてにたいする憎悪を養っていたのだろうか。ただ断っておきたいが、私の場合、サディスムはこれら都合のよい精神分析学の理窟通りにはいかなかったのだ。私はたんに女性にむかってのみ、自分の加虐本能を感じたのではない。女性のみならず、すべての人間、大袈裟(おおげさ)にいうならばすべての人類を苛(さいな)みたいという欲望を私は後年、感じだしたのである。

先を急がねばならない。もう余り時間はないのだ。ふたたび烈しい炸裂音が、この部屋の窓をゆるがせ、壁や天井から、こまかい粉を落としてくる。今、破壊されたのはラファイエット橋だろう。

だが、そういうことは、どうでもいい。ナチが敗走しようが、聯合軍がリヨンを奪回しようが、ファシズムが潰えて、所謂(いわゆる)、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

民主主義が勝利をしめようが、そんなことは、私のあずかり知らぬこと[25]だ。抗独運動者、コミュニスト[26]、基督者たちがそこに歴史の進歩、正義の説明を托そうが私は無関心である。

もし、明後日のリヨンの運命が私に関係しているものがあるとすれば、それは、私が独逸秘密警察（グシュタポ）に協力した裏切者として糾弾されることだけである。マキ[27]やその味方を裁き、拷問し、虐待した、あの「松の実町（ボム・ド・テール）」事件の一味としての同胞？から復讐されるだろう。勿論、逃げるつもりだ。私は生きねばならぬ。第一、歴史が、この私を、いや私の裡の拷問者を地上から消すことは絶対にできないのだ。その事実を私はこの記録にしたためたいのである。

II

だれも私のほの暗い秘密に気がつかなかった。なるほど母も教師も私を天使のような子供とは思ってはいなかったろうが、それでも、やせて蒼ざめた勉強好きな少年ぐらいには考えていたろう。彼等は瞞（だま）されていたのだろうか。いや、そうではない。あのイボンヌと犬との光景が私の存在の底に燃え上らせた情欲はその後、つかの間にせよ、灰の下に埋れていたのである。周囲のものたちが私に描いている影像に自分をあわせていく間に、いつか私自身もあの事さえ忘れてしまっていた……

私は他の少年より肉体の発育が遅かった。リヨンのオペラ座裏のアンリ四世中学校にはいっても、他の友だちが好んで話す女学生（レ・フィーユ）のことやガリーエーヌ街[28]の淫売（ピュタン）の話に殆ど興味がなかった。どうせ自分がもてぬぐらいは知っていたのである。この年頃の少年たちが必ず一度はかかる「稚児（ペダル）さん遊び」[29]の

熱病にも全く無関心だったと云ってよい。だが時として春の黄昏、あの十二歳の病気の日にそこに靠れたと同じように、硝子窓から、グリーシヌの花の散る人影ない小路を見おろしながら、体がふるえるのを感じた。心の中で私の手はなにかわからぬものを苦しめるために痙攣していた。寝巻を通してシーツまで汗まみれになりながら、その妄想を追い払わねばならなかった……

アンリ四世中学校を終える前、その年の夏休み、父はいつになく、私を伴ってアラビアのアデンまで旅行した。それは彼にとっては、商用のためであった。彼の経営していた工場が、アデンから亜麻を買い入れるためだ。しかし私にとって、その旅行のあの日は……

あの日、あのことをなしえたのは、道徳、宗教、家庭、学校がそこに住む一切の人間の本能や欲望をしばりつけている保守的なリヨンの重くるしい空気から突然、南東アラビアの砂漠のなかに自分を発見したためなのだろうか。それともあの八月の紅海から吹きつける、気も狂いそうな暑さのせいだったろうか。

船は八月中旬、アデンに着いた。そしてわれわれはこの街で唯一つの西欧的な宿舎イングランド・ホテル[30]に泊った。父は一日中、契約先の出張商会の連中とかけずりまわっている。私は一人で放っておかれた。もう母の監督もない、牧師の束縛もない。私は自由であり、いかなる行為もなしうる状態にあった。

目も昏むような熱さの中で生まれてはじめてあたえられた、この解放感を私はゆっくりと味わった。アフリカの黒人、褐色のアラビア人、黒布を顔にまいた女たちのみが蠢いている白い迷路もひそかに一人で歩いた。この街の何処からも、青いギラギ

ラと光る海と、その海べりに積まれた城館のような塩田とが見える。太陽は白熱した円球のように背後の裸山の上にいつも静止している。そして空の色は重く、鉛色であった。

私はその日、土民たちの往来する迷路で曲芸をみた。曲芸師は、若い、殆ど裸体にちかいアラビア娘と一人の少年である。娘の裸体は汗と油とにヌルヌルと光っていた。彼女は銀色の蛇に似た手脚をくねらせておどった。見物人たちは、五、六人の土民だけである。彼等は骸骨のように痩せた脚をくんで、ミノと呼ばれる焼菓子をかじりながら見物していた。

突然、娘はつれの少年を地面に寝かせた。彼の脚は徐徐に彎曲（わんきょく）してそりかえったまま、頭の上まで届いた。その姿は交尾の殺那の蠍（さそり）のようだった。裸体の娘は、少年の足と頭との上に飛び上った。少年の体は、殆ど耐えきれぬ程、弓なりになった[31]。

「キイ！」

たしかに彼のくいしばった唇からは苦痛の呻（うめ）きがもれた。しかし娘は、容赦なく、その頭の上で足ぶみをはじめた。彼女の黒い眼は細く、ながくなり、残忍な光に燃えた。

私は倒れそうだった。太陽は先程と同じようにギラギラとアデン背後の裸山の上で動かない。重い、鉛色の空の下で空気は膨れあがり、膨れあがり、私の体を痺（しび）らせていった。私はホテルまで夢中で走りかえった……

その翌日、父はポート・サイド[32]まで出向くつもりになっていた。勿論、彼は私にこのエジプト第一の海港を散策することを奨めた。しかし私は断った。私は父の不在を利用してもう一度、あの迷路まで行かねばならなかった。

更にまひるである。私はシャツをぬぎ色模様のＹシャツに着かえた。父が食事代にくれた紙幣をポケットに入れ、私はあ

の曲芸の場所にでかけた。

少年は昨日とおなじ場所にいた。しかし、彼は今日は行きかう通行人に物乞いをする乞食になっていた。片言の英語で彼は私にアデンを案内すると申し出た。

二人は歩きだした。彼は私の前になり、うしろになり、時々意味のわからぬ英語で話しかけた。太陽は今日も白熱の円球のように重くるしく静止している。突然、少年は「ナイス・ガール」とわめきはじめた。彼は私を昨日のアラビア娘の所に案内するつもりらしかった。不機嫌に私は首をふった。塩田の近くに来た時、われわれはたちどまった。二人は汗まみれになっていた。私はYシャツをぬぎ、上半身、裸となった。それから、我々のいる前面に、塩をふいた褐色の岩壁が厚く不気味にそびえているのを見てから、初めて、ポケットの紙幣をとりだした。

前面の岩石は熱風に焼け爛れた枯草の中にどぎつい原色のまま転がっている。私は濡れたYシャツを右手に持ったまま進んだ。少年も黙って従った。濃い黒色の影を、岩は背後に落している。我々はたちどまった。首も裸体の胸もべっとりと汗にぬれていた。

私は彼に囁いた。なにを云ったのか覚えてはおらぬ。口はカラカラに乾いた。少年は私の腕に押されたまま、岩石のうしろの秘密の影のなかに倒れた。

……海は真青だった。海から吹きつける熱風を私はあらあらしく吸いこんだ。私は太陽をみた。それはやはり鈍い白い円板のように静止していた。少年が岩影のなかで気を失い、灰色の草の中にうつ伏しているのをふりかえりながら、白い路を歩いてホテルに帰った。しかし、私は痺れた記憶のなかで、私にからまれながら、あのアラビアの少年の眼が被虐の悦びに光り震えていたのをハッキリと思いだすことが出来た……

アデンの旅行後、ほとんど白痴のような状態になった。なにをするのも懶(ものう)い。すべてのことに関心も、気力も持てない。一日中ベットの上にねそべって、煙草を幾本もふかし続け、濁った眼を虚空に注ぎながらジッとしていた。時々、あの原色のなまなましい岩の赫(かがや)きと、その岩の背後のあまりにも濃い影のなかに、うつ伏しに倒れているアラビアの少年の裸の姿態が甦(よみがえ)った。私の唇はふるえながら（そうされるに価するんだ）と呟いた。しかし、少年が、なぜ、そうされるに価するのか、いえなかった。

新学期がはじまった。それは、私等、アンリ四世中学校の最高学級生徒にとっては、大学入学資格試験準備のための年でもある。われわれ、哲学級の生徒のために、特にリヨン大学哲学科のマデニエ氏[33]の講義があたえられた。講壇の上にこの老人は、葡萄酒の愛用と肉食とで、薔薇色に色づいたまるい顔をのせ、甘ったるい微笑を唇にうかべて「子供(モンプ)たち(チ)よ」としゃべりはじめるのだった。私はその充ち足りた顔が非常にイヤだった。このカトリックの哲学者が説く、人間の善や徳、人間の精神的進歩、人間の歴史的成熟という言葉を、私は耳もとで幻聴でも鳴っているように滑稽に思いながら聞いていた。十七歳、十八歳のすべての純情な学友たちはすくなくとも、これらの言葉の真実性と価値とを心の底ではうたがっていなかったのに、私だけが、なぜそれをおかしく思ったのだろう。もちろん、こちらには、そうしたモラリストの信念をくつがえすだけの理論も思索もあるわけではない。ただ、私は自分が斜視の青年であること、あの十二歳の日にグリーシヌの花の散る窓からみたイボンヌと老犬の光景を知っていた。アデンの迷路で少年の頭に躍り狂った褐色の娘の裸像の記憶をもっていた。そして白く燃えた円板の太陽の下で熱風に焼けただれた枯草と、岩の下で……、

それを思いだすだけで充分だった。

翌年、父は死んだ。情婦とドライブしていた自動車が樹にぶつかったのである。一九三八年の夏である。父の死にあっても、私は慟哭(どうこく)も悲哀も感じなかった。もちろん、もう神や永遠の生命を信じてはいない。私はその秋、ベルナール街にあるリヨン法科大学で行われた大学入学資格試験で、マデニエ氏が我々に教えた「善」「徳」「理性の優位」「歴史的展開」という言葉をあの老人の甘ったるい顔を思いながら答案の上に書いた。試験に合格した時、私の将来に弁護士(アボカ)をゆめみていた憐れな母は泣いて喜んだが、私はくらく皮肉に微笑した……

なにごともどうでもよかった。あのイボンヌと老犬との思い出以来、兎も角も私は周囲の人間を欺(あざむ)きつづけて来たのではないか。父は私のアデンの秘密を知らずに死んでいる。母は、私がいつの日かレピュブリック街に事務所をひらくのを心に描いている。

もし、すべてが、そのままだったなら、私は周囲の者たちが抱いている影像に応じながら生きていったかもしれぬ。

しかし、戦争が起った。その翌年、ヒットラーは麾下(きか)のナチ軍にポーランド進撃を命じたのである。

III

その戦争がはじまる一年前、八月下旬の暑くるしい午後、私はぶらぶらとクロード・ベルナール街の法科大学にでかけてみた。大学入学(バカロレア)資格試験を合格した私は、そこに九月から入学することになっていたのである。

大学はきびしい残暑の日差しに照らしあげられて、療養所の安静時間のようにガランとしていた。ただどこか、遠くで（恐

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com